

煙突の見える場所

—— 映画文学人生論

原作：椎名麟三『無邪気な人々』（1952年）「文学界」
監督：五所平之助（1953年） 脚本：小国英雄
出演：緒方隆吉 上原謙 音楽：芥川也寸志
弘子 田中絹代 撮影：三浦光雄
久保健三 芥川比呂志 石橋勝子 花井蘭子
東仙子 高峰秀子 池田雪子 関千恵子

あらどうしたんですか、この赤ん坊

——どこから来たの

五所平之助監督の映画『煙突の見える場所』には不思議な味わいがある。私は五度観たが、いつも最後の煙突が一本に見えるシーンで感動する。

画面上で、煙突は見る場所と角度によって二本に見えたり、三本に見えたり、四本に見えたりするが、最後のクライマックスでは一本。

ほとんどの映画は感動しても最初に観たときだけで、二度目か三度目には手口がわかってしまうせいか、それほど感動しない。ところが、『煙突の見える場所』だけは手口がわかっていても、観る度に感動するのはなぜだろう。

原作の椎名麟三『無邪気な人々』を読んでみると、煙突が見える場所はどこにもない。その代わりに、電車の線路の描写がある。「彼は、線路を遠くまで見わたした。青い信号灯に、青く光っている重そうな四本の鉄の延棒が、長ったらしくのびているだけであった。建三は、空虚を感じた。何事もありやしないじゃないか」。

また、映画では、他人の赤ん坊を押しつけられた夫婦（上原謙と田中絹代）が、「あらどうしたんですか、この赤ん坊——どこから来たの」と、警察にも届けないで、困っている。下宿人の久保健三（芥川比呂志）は、「馬鹿げた正義感にかられて、勤めを忘れるな」と言いながら、勤めを休んで、赤ん坊の両親の行方をつきとめるが、彼らは

煙突の見える場所

映画文学人生論



は引取ろうとしなかった。結局、押しつけられた夫婦が世話をするしかない。妻は納得できず、「やはり、預けることは出来ませんの」と、訴えたが、「僕たちはそんな風な責任のがれは出来ないので」と、夫は主張する。仕方がないので、育てていると、そのうちに情が湧いてくる。

すると、忘れた頃に、突然、実母が赤ん坊を引き取りにきた。今さらそんな勝手なことをと、育ての親は反発するが、やはり赤ん坊は実母が引き取ることになる。めでたし、めでたし。という下町の人情話らしい結末だ。

ところが、原作の結末では、赤ん坊の世話をする人はみんな姿を消してしまい、誰もいない。

墓場のようにしんとした闇のなかで、重子（赤ん坊の名前）は「この家へ来てはじめて、にっと笑った。その笑いには、何の意味もないことは勿論である。それから重子は、手を動かしながら、「ああ」と低い声を出した、という。

この結末で原作の読者は実存、不条理、神の沈黙、神の恩寵などなにがしかの哲学的真理にふれた気がするかもしれないが。下町の人情話をもとめる映画の観客を感動させることはムリだろう。

原作では夫は信者だが、妻は信者ではない。椎名麟三は。共産党員を経てキリスト教に入信した第一次戦後派の作家。脚本は小国英雄。

煙突が一本になる土堤の春